

とある古墳の夜明け

考古学×科学 ～実は仲良し～

専門家である考古学の谷川先生と文化財保存科学の松井先生にお話を伺いました。

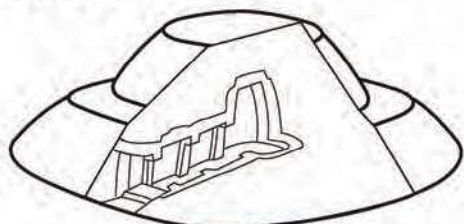
狛江はやっぱり古墳が非常に多い地域なので、古墳群の中に街があるっていうふうに逆に考えてもいいくらいじゃないですか。（谷川）

—猪方小川塚古墳が残されたのは—

猪方小川塚古墳は、切石を組んで精巧に造られた横穴式石室をもっていますが、そういう古墳はあまりないんです、狛江の周辺には。私も発掘している現場を見に行くと、非常に驚きました。これだけの横穴式石室が新たに発見されるなんて。

非常に良い古墳なので、残されればいいなと思っていましたが、家を建てるための事前の発掘調査だったので、それは難しいかなと。ところが、早い段階で市がその土地を買い上げるようになって。これはあまりないことだと思います。狛江市は大英断だったんじゃないですかね。

古墳の価値を評価していただき残されたのは、われわれ専門家にとってはありがたい話ですし、長い目で見れば市民の方々にとっても良い財産になったのではないかなと思います。

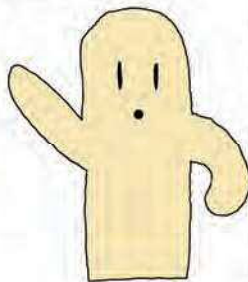


横穴式石室の断面想像図

横穴式石室が狛江にあったなんて
すごいね、谷川先生！



たにかわ あきひろ
谷川 章雄 先生
早稲田大学教授
専門は考古学
日本考古学協会の会長
猪方小川塚古墳保存整備検討委員会委員長
江戸時代の墓制について多くの研究がある



—古墳を現地に残すことが重要—

古墳は通常の遺跡と違って、地上に塚があり、造られた当時は墓として機能していました。それが、時代が下って、現代まで残ったってことは、長い間一種のランドマークとして認識されてきたわけですね。

その場所性っていうのは非常に大事で、古墳時代で終わりではなく、その後もその場所にあることによって、いろいろな形で利用される。信仰の対象だったり、宗教的聖地になったり、いろいろな形で利用されて残っていくわけですね。

だから、切り取ってどこかに持っていけばいいわけではなく、やはり現地にあるからこそ意味があって、その場所が昔からずっとランドマークとして認識され続けてきたということに意味があるんだろうと思います。時代を経て、人が住み続けていく中で、古墳時代の古墳がランドマークとして生き残ってきたということは興味深いですね。

—猪方小川塚古墳を歴史公園に—

史跡の本質的な財産・価値というものを活かした形の公園になっていると思います。公園の面だけが突出しない、文化財だけが突出しない、バランスがうまくとれたいいものができていると思います。

一般的な史跡の整備では、どうしても文化財の方が前面に出てしまいがちですが、やはり公園なので、人が集まってきたり、利用したりということ踏まえて考えなければいけない。単なる史跡ではなくて、公園としても魅力的な。文化財が周辺と違和感なく街の中にうまく埋め込まれていく、その仕掛けとして歴史公園は非常に良いあり方だと思います。

歴史公園として整備していくこと自体が一つのチャレンジですが、地域によって様々な特徴があって、いろいろな種類の文化財を、歴史公園としてどのように整備していくかは、新しい試みとして取り組んでいく価値があると思います。



発掘当時の石室